

07・ストーカー襲来（頼れる年上とは、冷静に危機回避するものである）

06から数日後。一月二十四日（金）十五時ごろ。
すずらん市汐見台。

場所は、スーパーの裏にある、小さなカフェ。

汐見台唯一のおしゃれスポットともいえるそこで、主人公は今、やっぱりスマホで漫画を読んでいる。

読んでいるのは、唯為理の漫画……は、今はちょっと場所的に控えた方が良いので。
昔から好きな作品である。

それは今、漫画アプリで期間限定無料公開中だ。

なので、主人公はこれまで紙版を死ぬほど読み返したにもかかわらず、また読んでいるのである。

今、画面に映っているのは、序盤の山場だ。
主人公の少年が、迫りくる理不尽に、毅然と、冷静に対処するシーンである。

これによつて流れは大きく変わり、彼は大きな目的に一步近づくのだ。

彼は作中においてはちょっと地味な男性で、ファンからも『イマイチパツとしない』もつと活躍してくれてもいい』と言われる事がある。

だが主人公は、まつたくそうは思わない。

彼はいつも、時に自分自身を犠牲にしてでも、最善の選択を探している。

それを感情的にならず実行し、後から『俺かっこいいだろう』と主張する事もなく、淡淡とやるので大変格好いい。つまりは、憧れの男性なのだ。

だから、主人公は思う。

自分もこんな風に、絶対に承服しかねるような理不尽に出会つたら……。
その時は彼のように、冷静に乗り切つてみせる！ と。

まあ、悲しい事に自分は彼のかなり年上……どころか、そろそろダブルスコアがついてしまいそうな位、年が離れているのだが……。

と。思つていると、スマホの画面が暗転し、着信画面に切り替わる。
唯為理から電話がかかってきたのだ。

SE1 カフェの環境音

【最初から最後まで流す】

【0～5秒ほどまで流してSE2】

【その後、音量をごく小さくして、既定の位置まで流し続ける】

SE2 主人公のスマホの着信音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「もしもしー？」

そう……主人公は今、唯為理と待ち合わせをしているのである！

「慌てるあまり、ものすごくテンパっている。でも、今までに比べて声が甘つたるい」
あつ。唯為理です♥

【だが、甘い声を出している場合ではない事に気づき、必死で訴える】
もうすぐ終わります。後三十分で絶対仕上げます。
もう少しだけ、お店でお待ちいただけますか？】

（主人公）

「あはは♥ 大丈夫だよ。

原稿頑張つて？ 今から読むの楽しみにしてるから」

主人公、穏やかに、にこやかに答える。

対する唯為理、ものすごく嬉しい。

唯為理は今原稿中で、おまけに作業が押しているせいで、主人公を待たせてしまつている。

でも、主人公はそれを責めず、許してくれる……。

大好き……♥

と、思つてしまう。

〔嬉しくて言葉が出ない〕

あつ……♥

【もはや好意を隠さない】

はいっ！ 原稿頑張ります♥

【ものすごくやる気がわいてくる】

では。終わつたらすぐ電話しますので。失礼しますっ

〈主人公〉

「うん♥ じゃあまたね♥」

こうして、通話は終わるが……。

SE3　主人公が通話終了ボタンを押す音

【最初から最後まで流す】

……ねえ、ちょっと今の、カツプルっぽくなかった？

主人公、すでに憧れの彼っぽく振る舞う事をすっかり忘れて、一人ニヤニヤする。
今日は機嫌がいいのだ。

唯為理に会えるし、漫画は好きなエピソードが更新されたし。

さつきスーパーで、また例の変身ヒロインガチャもできたし。しかもダブルなかつたし。
が……。すぐに『スン……』と真顔になる。

……いや、ナイナイ。

同性で距離が近くなつてくると、ちよつと恋人みたいなノリになる事つてあるよねー。
異性より気安くなりやすい分、むやみにイチャイチャしちゃうつていうか。

そういう二人、めつちや見かけるよね。男性同士でも女性同士でも。他の組み合わせもあると思う、うんうん。

アハハ。ちよつとこの前『大好き』って言われたからって、その気になりすぎだよね、
わたし！

……アハ。アハハハハ……。

……と、主人公、大げさに否定してみるものの、数秒経つと、またニヤニヤしてしまう。

でも、後三十分位で、唯為理ちゃんに会える……♥

今日もいっぱい、楽しいお話して、おいしいもの食べて、仲良く並んで、歩ける……！
ウヘ、ウヘヘヘ。幸せ。

という事で、ただでさえ『痛い』『落ち着きがない』『こんなアラサーで大丈夫か?』でおなじみの主人公だが、最近はますますこれらが顕著だ。唯為理に恋してしまったのだ。

もちろん、わかっている。唯為理の『大好き』にはたぶん、そこまで深い意味はない。単に自分が舞い上がりすぎているだけだと。

だつてあの日は、結局そのまま特に何もなかつたし。

あの後、よほど道が空いていたのか、おばあちゃんたちはすぐに帰つてしまつたし。

結局最後まで、主人公は唯為理に、改めて意図を聞く機会を得られなかつたのだ。

それに……男性はちよつとどうか知らないが……女性には一定数、気軽に他人に『好き』と言えるタイプの子がいる。

だから、それをいちいち真に受けていたら、人間関係は立ちゆかないのだ。

つかさー昔の澪とかそんな感じだつたよ。今とはわりと別人だつたよ?

ほら、やつぱ真に受けちやならん。女の子から女の子への『大好き』は。
せいぜい『いつもありがとう』位の意味に受け取つとくのが吉だぜ。
おお、澪の顔を思い浮かべたら冷静になつてきた。ありがとう澪。

それでも唯為理との日々は甘く、主人公は最近、こんな風に悩む事さえ幸せだつた。
出会つた当初こそ、唯為理は何か事情のありそうな子に思えた。
今もそれは変わつていなし、おそらくそうなのだろう。

だが、先日の一件で、おおむねその事情に見当はついた。

唯為理はきっと、人間関係のトラブルで、すずらん市に休みに来たのだ。

だから、出会つた日のあれも『なんか妙だ』と探偵ごっこをしていたけれど……。
今思うと、単に、漫画を描くのに忙しくて、疲れてただけなのかもな。

と、主人公は思うようになつてゐる。
しかし、主人公は詰めが甘かつた。

探偵女子には憧れていても、探偵の才能には欠けていたのだ。

勘といふものは意外な位当たるのに『気のせいだ』と思うようになつてしまつていたのである。

そこに……一人の女性が近づいてくる。

彼女は先ほど、主人公とは少し離れた席から、主人公と何者かが電話するのを聞いていた。

その会話に『原稿』という単語が聞こえたので、それが非常に気になつたのだ。

だが、主人公は電話の相手と、特に『これからここで待ち合わせしている』とは言つていなかつた。

つまり『今原稿を描いている人物』は、待つていれば必ず現れるわけでもなさそうだ。
それなら……。

と、考えて、近づいてきている。

SE3から5秒ほど間。

SE4 絢の足音

【最初から最後まで流す】

〈絢〉

「穏やかに、にこやかに。」

『理想の大人の女性』『かわいい、ゆるふわお姉さん』という感じで
こんなには

〈主人公〉

「？ こんなには」

……およ。美人。

真の『お酒のCMに出てる女優さんみたいな美人』だ！

主人公、突然見知らぬ女性に声をかけられて驚くが、すぐに『道かな？』と思う。
知らない人に道を聞かれるのには慣れているのである。

〈絢〉

「あの、恐れ入りますが……。
少しお伺いしてもよろしいですか？」

〈主人公〉

「なんでしょう……？」

あ。道だわ。これ道だわ。

主人公、完全にそう思い込んで微笑むが……。

〈絢〉

「この辺りに、奥平（おくだいら）さんという方のおうちはございませんでしょうか？」

その言葉で、なぜか顔がこわばる。

理由はわからないけれど、何か、ひやつとするものを感じたのだ。

〈主人公〉

「いいえ……？ その方が、何か？」

主人公、少し動搖しつつも、会話を続ける。

スマホを一度ちらりと見て、ついさっきまで読んでいた漫画の、彼を思い浮かべる。

……とりあえず、嘘は言つてないぞ。

この辺にあるのは小湊さんちであつて、奥平さんちではないからな。

この人、なんだろう。唯為理ちゃんの知り合い？

……でも、じやあなんで、唯為理ちゃんちの事を知らないの？

〈絢〉

【質問する以上は、自分と唯為理の関係を、説明する義務があると感じる】

あ、えっと。

【少し間をあけてから。恥ずかしそうに】

付き合つてる、人なんですけど。

【『お恥ずかしい』という感じで】

ちょっと喧嘩しちやつて……。話したいんですけど、電話にも出てくれなくて。
困つてるんです

〈主人公〉

「えつと……。それで、直接家に行く事にしたんですか？」

「ご自宅の場所、ご存じないんですか？」

主人公、女性が発した『奥平さんという人と付き合っている』という言葉に激しく心を揺さぶられつつも、しばらく様子を見る。

そう、自分は今、あの漫画の彼なのだ。

彼なら、まずは落ち着こうとする。それから、少しでも戦況を理解しようとする。こんなところで、心乱してはいけないのだ。

そう思つて、どうにか呼吸を整える。

それに『奥平』って苗字の、全然違う人かもしれないし……。

女性は続ける。

〈絢〉

「説明不足であつた事に気づく」

ああ。実はその子、地元はここじゃなくて。

【唯為理の祖父が亡くなつた事を知らない】

おじいさんおばあさんが住んでいるのがすずらん市だって、前に教えてもらつたんです。

だから、遊びに来ているんじゃないかなって」

んん……？

主人公、不審に思う。

なぜなら、唯為理の祖父は昨年末に亡くなつていて。

唯為理と親しい人物なら、この事を知つてもおかしくないはずだからだ。

少なくとも、唯為理は一ヶ月以上前にはすずらん市に来ている。

つまり、この女性が指す『奥平さん』が唯為理である場合、二人はそれよりも前に喧嘩している事になるのだ。

その場合、その間に唯為理の祖父が亡くなり、唯為理はすずらん市に行く事になつた……。という事になるが、なんだかおかしい。

唯為理の性格なら、突然しばらく家を離れる事になつた場合、恋人には、たとえ喧嘩していても……きちんと伝えそうなものだが。

……かまをかけてみよう。

〈主人公〉

「ああ。三人で過ごしてるんじゃないかなって、事ですか？」

〈紹〉

「引つかかる」

そうです。三人で過ごしてるのかなって。せつかくならご挨拶したいですし

これは、お祖父さんの死を知らない。つて事だよね。
でも、これじや弱いな……。

つか、喧嘩した恋人のおじいちゃんおばあちゃんちまでアポなしで行つて。
すんなり仲直りするだけじやなく、そのままおじいちゃんおばあちゃんに挨拶できると思つてるの？ この人。

そんなちよつとした喧嘩なのに、別の地域からここまで来てるの？
家の場所も知らないのに？
——なんか、変じやない？

〈主人公〉

「それなら、深刻な喧嘩じゃないんですね。

だつたら、もう少し待つていれば、向こうの気持ちも落ち着いて……。
電話にも出てくれるんじやありませんか？」

〈絢〉

「はい。深刻な喧嘩ではない。

もうちよつと待つてれば、向こうから電話もかかるてくるかも……。

【少し間をあけてから】

私も、そう思うんですけど。

でも、やっぱりちゃんと話を聞いてもらわなくちゃって。

私の気持ち、わかつてもらわなくちゃって。

【少し間をあけてから。どこか悲しげに】

これが、最後になつちやうかもしれないし」

これが最後？ 下手したらこれつきりになる位、深刻な喧嘩してるつて事?
あれか？ 転勤が決まつてるとか？ いや、別れないなら『最後』にはならないよね。

そもそも『深刻な喧嘩』じやないんだから、別れの危機ではないんだよね。

この人、何を根拠に『最後』って言つてるんだろう。それ位悲観しやすい人なのかな。
とにかく……やっぱり、ちょっと言つてる事変だな。

〈主人公〉

「大好きなんですね。その方の事が」

〈絢〉

〔照れて〕

あは……そうなんです。

〔うつとりと、心の底から〕

大好きなんです」

何がおかしいって。見ず知らずのわたしに、やつたら語りたがるっていうのが……。
ねえ？

主人公、女性を不審に思うあまり、思わず黙ってしまう。
すると女性は『さすがにちょっと話し過ぎた』と思つたのだろう。

はにかんだように笑うが、結局話を続ける。

〈絢〉

【恥ずかしそうに】

すいません。話しそぎちやいましたね。

【少し間をあけてから。照れて】

自分でも、夢中になり過ぎちゃってるなって、思います。

【落ち着きつつも、真剣に】

だつて以前の私だつたら、きつと諦めちゃつてました。

『喧嘩したらもうダメかな』『価値観が違うなら一緒にいられないのかな』って。
自分を納得させようとしてたんじやないかな。

【少し間をあけてから】

でも、今回は、そうしたくないなって。

【当たり前のように『彼女』といつて、恋人の性別を特定させる】

もう一度彼女に、何が正しいのかわかつてもらう機会が欲しいんです

何が正しいのか、わかつてもらう……?

主人公、女性のその言葉にひきつる。

彼女の口ぶりは、まるで自分が絶対に正しくて、相手にそれを『わからせてあげる』という態度だ。

主人公はその姿に、とても嫌なものを感じてしまったのである。

あれかこの人。恋人を支配したいタイプか。

好かんすなあ、そういう手合いは。

……いや、いやダメ。『奥平さん』が唯為理ちゃんかもしれないからって、わたし、たつた今出会った人に過剰反応しそぎ。冷静になれ。冷静になるのだよ、きみい。

とりあえず『奥平さん』は女性……これは間違いないって事で。

主人公、必死に漫画の彼になりきつて、手に入れた断片的な情報から、二人の関係を推理しようとする。

だが、そもそも唯為理は、地元で具体的に何があつたのか、一切主人公に話していない。恋人がいるとも、いないとも言つてない。

主人公が『いない』と思い込んで、唯為理との恋愛を期待しているだけだ。

だから、この人の言う『奥平さん』は唯為理ちゃんの事で、二人は普通に付き合つてて。
で、痴話げんかして。

怒つた唯為理ちゃんがこっちに避難してて、電話にも出なくて。
それで、らちが明かないと判断した、この人が追いかけてきた。

……それで筋が通る気がする。
唯為理ちゃんが女性も恋愛対象の子なら、わたしに対して、妙に距離が近いのも納得が
いくし。

……でも、それだと今度は佐智さんの態度が変だ。だつてあれ、わたしと唯為理ちゃん
を接近させようとしてるよね。間違いなく。

十年会つてないから、唯為理ちゃんと、このお姉さんが付き合つてること知らないとか?
でも、恋人との喧嘩が原因ですズラン市に来たのに。あれだけ仲良さそうなのに、唯為
理ちゃんがそれを話してないのも変じやない?

だめだ、全然わからん。
でも……。

〈主人公〉

「……実はわたし、地元の人間じゃないんです」

この人なんか、おかしくない？ 完全に主観かもだけど変じやない？

わたしこのまま唯為理ちゃんに『お付き合いしてる人が会いに来てるよ』って、連絡していいの……？

〈絢〉

「心から申し訳なさそうに】

あら。あなたも地元の方ではなかつたんですね。

ごめんなさい。なのに私つたら一方的に】

そうだそだそだそだ。冷静になれ。冷静になるのだよ、わたし。

人を簡単に『＊＊＊＊＊』なんぢやないかつて疑うなんてね。いけないよ、うん。わたしよ。わかつてるのかい？

〈主人公〉

「でも、祖父母がこの辺に住んでいて。祖母がもうすぐ来てくれるんですよ」

〈絢〉

「『それでは『原稿』を書いているのは祖母だつたのか?』と、内心少し動搖する
えつ? ああ。さつきお電話されてた方ですか?」

〈主人公〉

「そうです。

その人にかけてみるので、ちょっと待つていただけますか?」

〈絢〉

「心から感謝して」

「ありがとうございます……!」

お知り合いに、電話で確認していただけるなんて、助かります。
では、お待ちしてますね」

わかつてるけど変だわ。この人なんか変だわ。

冷静な判断じやないのはわかつてる。

でもわたし、この人を唯為理ちゃんに会わせたくない。

——だつてこの人が、唯為理ちゃんのストーカーとかだつたらどうするの。

〈主人公〉

「はい、じゃあちよつと向こうで電話して来ますね」

S E 5 主人公が席を立つ音

【最初から最後まで流す】

主人公、こうして笑顔を貼り付けて、その場から離れようとするが……。

それは、すぐに引きはがされる。

〈絢〉

「まるで、わざと見せびらかすように】

あ。そうだ。写真があるんです】

S E 6 絢がスマホを取り出し、画面を見せる音

【最初から最後まで流す】

〈絢〉

「主人公に、堂々と唯為理の写真を見せて」

この、ボブの子なんですけど。

こんな感じの子が最近この辺に遊びに来ていなかつて、聞いていただきたいんですけど

〈主人公〉

「…………！」

〈絢〉

「真剣に。嘘は一つも言つていない」

よろしくお願ひしますね……。本当に、大切な人なんですね

もしかして、この人全部知つてるの？

わたしと唯為理ちゃんの関係、全部知つてて、わたしに声をかけてきたの？ で、写真見せてんの？

怖い。怖い。怖い怖い怖い。

澪に電話するのとは、比較にならない位怖い。
でも――……。

〈主人公〉

「――……はい」

SE7 主人の足音

【最初から最後まで流す】

SE8 主人がカフェのドアを開ける音

【最初から最後まで流す】

SE9 主人がカフェのドアを閉める音

【最初から最後まで流す】

SE10 外の環境音

【最初から最後まで流す】

〔0—5秒ほどまで流してSE12〕

〔その後、音量が小さくなる〕

〔その後、シーンが切り替わるまで流し続ける〕

主人公、店の外まで出る。

そして、約束した通りスマホを取り——……。

SE11 主人公がスマホを操作する音

〔SE3と同じ音〕

〔最初から最後まで流す〕

SE12 スマホの発信音

〔最初から最後まで流す〕

〈おばあちゃん〉

「方言。『遊ぶんでなかつたのかい』は『遊ぶんじやなかつたの?』という意味
もしもし? あんたどしたのー? 唯為理ちゃんと遊ぶんでなかつたのかい?」

一度フェードアウトする。

二時間後。十七時ごろ、青柳家の前の道。

SE13 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

【トラック終了まで繰り返し流す】

【0—5秒ほどまで流してSE15】

SE14 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

主人公が青柳家まで戻り、ガレージに駐車して玄関まで出てくると、なぜか佐智が待つ
ている。

〈佐智〉

「お疲れ様っす。おかえりなさい」

〈主人公〉

「佐智さん！ 来てくれてたんだ」

主人公、それを見て驚く。

まさか、佐智が来てくれているとは思わなかつた。

いや、これも当然の措置だらうか。なぜなら……。

〈佐智〉

「主人公が元気そうなので安心する】

来ますよ。

〔トーンが低い。真剣な様子で〕

大丈夫でしたか。変な女に会つたつて聞いたんで」

主人公、佐智がとても心配してくれているので、嬉しくなるとともに、心配させてはな

らないと強く感じる。

目の前で両手を広げて、ちよつとおどけてみせる。

〈主人公〉

「この通り無事です。……唯為理ちゃんは？」

〈佐智〉

「すごくホッとして」

そっすか。よかつた。

あ、唯為理は今編集さんから電話きちゃって、話してます。
一緒にお邪魔さしてもらつてるんで大丈夫つす

〈主人公〉

「そつか。よかつた」

佐智、一瞬悩むが、切り出す。

〈佐智〉

「【真面目な声で】

あの。お姉さんが会ったのって、茶髪のロングで髪巻いてて。
なんか、全身やつたら高そうな格好の、お姉さんと同い年位の女っすよね」

……やっぱり、佐智さんも知ってる人だつたか。

〈主人公〉

「……うん。すぐく羽振りがよさそうっていうか、身なりがよかつた」

そう……あの人格好は、このすずらん市で、おじいちゃんの車よりも浮いていた。
少なくとも、雪だるまみたいな格好してる女とは、並べちゃいけないやつだつたな……。

〈佐智〉

「少し早口になる。『やはり』と思つていて
で『絶対唯為理に会いたい』つて感じだつたんすよね」

〈主人公〉

「うん。なんか……唯為理ちゃんの恋人みたいな口ぶりだつた」

〈佐智〉

「でもそいつ、唯為理は母方の孫だから苗字が違う事も、じいちゃんが亡くなつた事も知らないし。

平日の昼間にフラつと現れて妙だから。

お姉さんは『これなんかおかしいんじゃねーか』って思つて、追つ払う事にしてくれたと。

〔少し間をあけてから〕

それで、青柳のばあちゃん呼んで。口裏合わせてもらつて。

何とかごまかして、すずらん駅まで送つたと。これで合つてます?」

主人公が、佐智があまりにも事態を正確に理解しているので『この人ってやっぱ賢いなあ』と思う。

同時に、頼もしくなる。

もし佐智がいなかつたら、自分は今晚、ずっと恐怖で震えて過ごしていたかもしねない。

〈主人公〉

「うん。そんな感じ。偶然車で来ててよかつたよね。

『ちょうどそつち行くんで送つていきます』みたいな感じで追い払つた

〈佐智〉

〔少しホツとするが、念を押す〕

その後（あと）、ちゃんと帰つた感じでした？」

〈主人公〉

「大丈夫。電車出るところまで見送つたから」

〈佐智〉

〔すごくホツとする〕

よかつたあ……！

【声が明るくなる。主人公を心から褒める】

お姉さん、やるじやないっすか！ こういうの何て言うんすか？

無血開城（むけつかいじょう）、みたいな？」

佐智、ここまで話聞いて、あからさまにホツとする。

先に帰つたおばあちゃんからも同様の説明を受けたが、主人公とおばあちゃんが別れた

後の事を、おばあちゃんが知っているはずもない。

だから事の顛末を、直接主人公から聞いて安心したかったのだ。

〈主人公〉

「開城できたかはどうかなあ……。

とりあえず、今は安心だと思うよ。唯為理ちゃんがうちに来てくれるなら猶更。
あーびびつた。マジびびつた。あの、やつぱりなんかおかしい人なんだね？」

〈佐智〉

「一度はテンションが上がっていたが、主人公に怖い思いをさせた事に気づいて】
はは……そうつすよね。怖い思いさしてすいません。

【少し間をあけてから。真剣に深く頭を下げる】

ありがとうございました。

また助けてもらつて、感謝してもしきれないっす」

〈主人公〉

「いえいえ。思うままでに行動しただけです」

主人公『当然の事をしたまでです』と言いかけるが、すぐにこれは少しも『当然の事』ではないと思ったので、やめる。

だつて本当に冷静な判断をするなら、あの時自分はおばあちゃんではなく、唯為理にかけるべきだつたのだ。

唯為理に直接二人の関係を尋ねて、事の真相を聞き出すべきだつたのだ。
それをしなかつたのは、怖かつたからだ。

唯為理の口から『はい。私は彼女とお付き合いしています』と言われたら、自分は間違いくなく深く傷つく。

それを避けたかつたから、主人公はあの女性を勝手に『おかしな人』認定して、追い払う事にしたのだ。

結果的には間違つていなかつたようだから、まだよかつたものの……。

主人公は自分のこの行動を、とても『当然の事』だとは思えなかつた。

……でも、あの人なんで電車だつたんだろうな。この地域なら、車のが楽だと思うけど。免許持つてないのかな。あ、雪道慣れてない地域の人なのかな。

そもそもあの人、何の仕事してるんだろう。

勤め人っぽいけど、金曜日の昼間にここまで来てるし。

いや、人の仕事を勝手に推測したり知ろうとしたりはいけないって、この前反省したばつかりじやないか。

……でも、やっぱりなんか変だつたような……。わかんないけど。

〈佐智〉

「それでも、本当にありがたいっす。

【少し間をあけてから】

んであの。その人なんすけど。

【少し間をあけてから。結局やめる】

いや、あたしがあんましやべんのもよくないっすね。

『唯為理から直接聞いて下さい』と言いかけて

唯為理から』

SE15 唯為理の足音

【最初から最後まで流す】

【遠くからだんだん近づく】

すると、そこで唯為理がやつてくる。

※声はだんだん近づいてくる※

「慌ててやつてくる」

「ごめんなさいお待たせしました……！」

主人公と佐智、そこで会話をやめて、二人とも唯為理の方を見る。
というか、うつかり玄関で話し込んでしまっていた事に気づく。

〈主人公〉

「唯為理ちゃん」

〈佐智〉

「おー。仕事大丈夫だつた？」

「佐智を気遣って、できるだけ明るい声を出す」

「うん。平氣」

佐智、一瞬悩むが、主人公と唯為理を二人きりにしようと思う。

帰りはきつと、主人公が送ってくれるだろうし、自分が迎えに行つてもいい。

〈佐智〉

「落ち着いた優しいトーンで」

じゃあわたし、先にうち戻つてるよ。

〔少し真面目な声になつて〕

あの人のことば、自分で話しな

「うん」

〈佐智〉

「真剣に」

お姉さん、今日は本当にありがとうございました。

明日また改めてお礼さして下さい。

〔少し間を開けてから〕

じゃあ、失礼します」

（主人公）

「うん。また明日」

「また後でね」

SE16 佐智の足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかっていく】

佐智、そのまま目の前の公園を突っ切って、小湊家に戻っていく。

主人公と唯為理は、しばらくそれを黙つて見送つて、こうして青柳家の玄関には、主人公と唯為理だけが残される。

主人公、唯為理に何から話せばいいのかと悩むが――――。

先に口を開いたのは、唯為理だった。

【落ち着いたトーンで、申し訳なさそうに】

あの……本当にありがとうございました。

嫌な思いをさせてごめんなさい。

【声がかかる】

「何てお詫びをしたらいいか、わからないです」

〈主人公〉

「ううん。平気。そんな事よりも……」

「【落ち着いたトーンで。覚悟を決めている】

「はい。だからせめて、あの人の事をお話しさせてくれませんか。

あなたには、知つてもらえたからって、思つてます」

〈主人公〉

「……わかった」

主人公『じやあ、うち入ろうか』と言おうとするが、よく見ると唯為理は、なぜかコートを着ている。

【落ち着いて、自然に】

「じゃあ、そこの公園で話しましょうか」

そしてそれから、話をする場所に公園を指定した。

一度フェードアウトする。

＊＊＊

数分後。青柳家と小湊家の間にある公園。

主人公と唯為理、ベンチに並んで座って話している。

SE17 外の環境音

〔SE14と同じ音〕

〔最初から最後まで流す〕

〔一度フェードアウトさせてから再度流し始める〕

〔その後、トラック終了まで流し続ける〕

〔落ち着いて。話す内容をあらかじめ、まとめてきているかのように〕

あの人は衛藤 紗（えとう あや）さんという方で、私を応援してくれる人です。

【少し間をあけてから。『リップ』は『リプライ』の略】

最初はSNSで知り合って。リップとかメールで、私の作品の事、話してくれて。
……すごく。いい方だと思つてました

〈主人公〉

「うん」

「でも、段々感じが変わつて行つて。

『ここはこうした方がいい』とか『あの作品はあなたしくない』とか、そういうのが
増えて。

【少し間をあけてから。少し声が震える】

でも、その位なら意見の一つかなつて思えたんですけど。

【少し間をあけてから】

そのうち私が、他のファンの方や、作家さんと話してても嫌だつておっしゃるようになつて。

【少し間をあけてから】

私、在宅のお仕事ですし、お仕事関係の方も、基本インターネット上のお付き合いなので。直接人と会つて話す機会つて、少ないんです。

【少し間をあけてから】

だからちよつと反応もらえるだけでも、嬉しくて。

同人活動も、SNSも。色んな人とお話しできる、すごく大事な場所だったんです。

【悲しげに】

だから『それは認めてほしい』って、お願いしたんですけど』

……えっ？ ちよつとそれ、おかしいでしょ。

そんなの、他人に許可を求めるような事じやないから。

事務所にSNSとか、接触イベント禁止されてる芸能人じやないんだから！

唯為理ちゃんは自由に交流していいでしょ。……いいよね？

主人公、絢の行動が理解できず、発言したくなるが、話の腰を折るのはいけない。
ひとまず最後まで聞く事にする。

〈主人公〉

「それで……『喧嘩』？」

「悲しげに。絢はあの件を主人公に『喧嘩』と説明したのかと思うと、ぞつとしている」

……はい。去年地元の即売会に出た時、衛藤さん來てくれたんですけど。私が他の人と話してたのが嫌だつたのかな……。

衛藤さん怒つて、騒ぎになつちやつて。

関係ない人にも迷惑かけちやつて。

【少し間をあけてから。申し訳なさそうに。当時を思い出して】

幸い、ちつちやいイベントだつたんで。

そんな、ネットで噂とかにはならなかつたんですけど。

ただ、地元の知り合いも巻き込んでしまつたので。

おじいちやんのお葬式の後、おばあちゃんも心配でしたし。

家族と話して、残る事にしたんです】

〈主人公〉

「初めて会つた時、すごく怯えてたのも、何かを衛藤さんだと勘違いした？」

「そうです。

あの時は……初めてあなたと会つた日は、ほんとに見間違ひだつたんですけど。

散歩してたら、衛藤さんが近くにいるような気がして。怖くなつて……。立てなくなつてたら、あなたが見つけてくれたんです】

〈主人公〉

「そうだったんだね……」

だから、初めて会った時、あんなに怯えていたんだ。

だから、佐智さんがやたらと過保護だつたんだ。

だから、いくら在宅のお仕事とはいえ、おばあさんの件があるとはいえ、一ヶ月以上も自宅に戻らずにすずらん市にいたんだ。

主人公、すべてがつながり、納得するとともに——……。

絢に激しい嫌悪感が沸いて、さつきまで一緒にいた事さえ気持ち悪くなってしまう。

でもそれは、嫌な正義感だ。そもそも、正義感と呼ぶのかすら怪しい。

主人公はこの件に関して無関係だ。

だから唯為理と佐智、二人からの情報と、自分が絢と過ごした短い時間だけを判断材料に、絢を悪人とみなし、敵視している。そんな不公平な状態にある。

もし主人公が『絢は嘘をついていて、唯為理が真実を話している』と思うなら。

それでも、『できるだけ公平に判断したい』と思うなら。

主人公は『唯為理は嘘をついて、絢が真実を話している』可能性も疑うべきだ。なのに主人公は、それを微塵も疑っていない。

唯為理が好きだから、唯為理の言葉だけを信じて、唯為理の味方になろうとしている。これは、ちっとも公平でも冷静でもない。

「はい。

【長めに間をあけてから】

こっちに来て、色々考えました。

本当は私が全部悪くて。

【ふり絞るように】

謝って、許してもらうのがいいのかもしれないって。

自分の事好きだつて言ってくれる人がいるんだから、その人を大切にして。言う通りにするのがいいのかもしれないって。

【少し間をあけてから。悲痛に】

でも。

【少し間をあけてから。涙声で】

そうしたら。心が死んじやう気がした……。

【泣きながら】

私が私じゃなくなつてしまふ気がしたんです

〈主人公〉

「そつか……」

主人公、目を落とし、大きく息を吸つて、吐いて、これから自分がどうするべきか考
える。

自分は憧れの彼には程遠いが、それでもその真似はできる。
それは——……。

【泣くのをこらえて、できるだけ落ち着いて話そうとする】

はい。これが、私がこの町に来た理由です。

【心から謝る】

もう誰も巻き込んじやいけないって思つてたのに、本当にごめんなさい』

〈主人公〉

「ううん。唯為理ちゃんは正しいよ。正しい事をしたんだよ。

あなたが間違っている所なんて一つもない

「驚いている。予想外の言葉で」

えつ？」

主人公は決める。

自分はこのまま、主觀を貫くと。

絢は正直に言つて、唯為理の事を大切にしているように思えた。

正確には『本人は大切にしているつもりである』可能性はあるが『客觀的には、とてもそうは見えなかつた』というところだらうか。

だから、主人公としては、とても好感が持てる相手ではなかつた。ていうか大つ嫌いだ。

もう一度現れたら、絶対に通報してやろうと思つてゐる。

だが、唯為理にとつては、単純に嫌える相手というわけでもないらしい。

だつたら、今自分がすべき事は、絢を批判する事ではない。唯為理を励ます事だ。

不当な扱いを受けて、自分に自信をなくしている唯為理の力になる事だ。

主人公、涙を流す唯為理を見て、思わずその小さな手を握りたくなるが——それはせずに、続ける。

〈主人公〉

「逃げてよかつたんだよ。

衛藤さんから逃げて、ここに。すずらん市に来てよかつたの。わたしが保証する。だつて唯為理ちゃんには、自分の心を守る権利がある。

相手の気持ちなんて関係ない。

自分の心が死んじやいそうになる相手と、一緒にいる必要なんてない。

唯為理ちゃんは、唯為理ちゃんがしたいと思う事をしていいの。

わたしはいつでも、それを応援するから」

「【涙があふれてくる。主人公の言っている事が信じられなくて、復唱する。でも、嬉しい】

私は、私がしたいと思う事を、してもいい……？」

〈主人公〉

「そうだよ。わたしが絶対に味方になるから」

主人公、そう言いながら、自分の言っている事は矛盾していると理解している。なぜなら自分は今、自分がしたいと思っている事をしていないうからだ。

ああ、今、唯為理ちゃんの事、めっちゃ、ぎゅってしたい。

強く抱きしめて『だから、わたしと一緒にいよう』って、『次は、衛藤さんが見当もつかない場所に、一緒に逃げよう』って言つて、唯為理ちゃんが『はい』って言うまで離したくない。唯為理ちゃんの事が好きだから、それを、もつとはつきりと伝えたい。

……でも今それをするとか、卑怯者にもほどがあるでしょ。

衛藤さんの件を使って、唯為理ちゃんに言う事を聞かせようとするなんて。

自分の正しさを押し付けるなんて、衛藤さんと、やつてる事何も変わらないじゃない。

【涙をこらえて】

ありがとうございます。

あなたは、本当に、優しいんですね……。

【長めに間をあけてから】

私、きっと

【あなたに会うために】と言おうとして、やめる】

あなたと過ごす為に、ここに来たんですね。

【長めに間をあけてから。落ち着いてお礼を言う】
本当に、お世話になりました

（主人公）

「え？……？」

唯為理、その時、主人公の顔が大きくながみ、今にも泣き出しそうになるのを認めるが、それでもひるまずに続ける。

もう、どうするべきかは決めていたのだ。

だから、外はこんなに寒いのに、青柳さんちではなく、公園で話す事にしたのだ。

【落ち着いて、きつぱりと】

明日、ここを出て行きます。

こっちには家族も、あなたもいる。

衛藤さんが来てるってわかつた以上、またご迷惑はかけられません。
【少し間をあけてから。残念そうに】

予定より早くなつちやつたのは、残念ですけど」

唯為理、思う。

そう。私は私に、わかってもらわなくちや。

この人は私の事なんて好きじやない。好きじやない好きじやない好きじやない。

誰にでも優しくて親切で、もし別の人と同じ目に遭つても、必ず助ける人なの。

だから、これ以上好きになつちやいけない。迷惑かけちやいけない。期待しちやいけない。依存しちやいけない。甘えちやいけない。

これ以上一緒にいちやいけない。この人の人生に、私はいらぬ。

（主人公）

「……急、すぎない？」

「申し訳なさそうにしつつも、迷いなく

ごめんなさい。でも、決めました。

私は衛藤さんに思つて いる事が言えません。会えればきっと、彼女のペースになりま
す。

【落ち着いて】

でも、もう言いなりにはならない。

だから会いたいと言われても会わないと、決めました。

そんな私の都合に、誰かを付き合わせたくはないんです」

主人公、唯為理の言葉を聞きながら、いくつもの言葉を飲み込む。

“嫌だよ。付き合わせてよ”

“わたしをその、逃避行の仲間にしてもよ”

“ここでお別れなんて嫌”

“だつてわたしは、唯為理ちゃんの事が――……”

なぜなら、主人公はつい先ほど、唯為理の意思を尊重すると言つた。
だからそれを撤回するような事はできないと思つてしまつたのだ。

〈主人公〉

「……お別れ会も、できないじやん」

「申し訳なさそうにしつつも、迷いなく

はい。

【少し間をあけてから。わざと明るく】

でも、ずっと会えなくなる訳じやありません。約束、もう忘れちゃったんですか？」

主人公、うつむいて泣きそうになりながら、ぐつとこらえて顔を上げる。

だつて今、唯為理との恋が終わつた事がわかつた。

唯為理はきっと、約束を守らない。

このまま、絢の前からも、自分の前からも姿を消すだろうと、わかつてしまつたのだ。

〈主人公〉

「……そうだつたね。

じゃあ、わたしがやりたい事を見つけられたら、その時はまた会つてくれる？」

【明るく】

もちろんです。あなたがやりたい事を見つけられた時。その時はお祝いです。
私、待つてますから」

「主人公」

「ありがとうございます」

主人公、唯為理の嘘に嘘で返しながら、さつき唯為理を抱きしめなかつた自分には、もはやそれを責める権利もないのだと気づく。

このまま何も気づかない、まぬけな友人のふりをして、彼女を見送るしかないのだと思う。

「主人公」

「じゃあ、友達として。明日、出ていく時は、駅かな？ そこまで送つていいくよ」

「わかりました。

じゃあ明日、始発に間に合うように、駅まで送つていただけますか」

「主人公」

「五時半くらいがいいかな？」

「ありがとうございます。じゃあ、五時半にここで待ち合わせましょう」

SE18 唯為理がベンチから立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

ここで唯為理が立ち上がり、主人公は『もうこれで話は終わりだ』と言われた気持ちになる。

それでもまだ、一緒にいたかった。

たとえば、もう少しだけ一緒にいられたら、まだ何かを変えられるかもしれない。

もう少しだけ話せたら、もう一度気持ちを伝える機会が得られるかも知れない。
そう思つたが……。

（主人公）

「……そしたら、うち戻つてご飯にしようか。

つつても、おばあちゃんが作ってくれるやつだけど……今日はシチューが」

「申し訳なさそうにしつつも、迷いなく

ごめんなさい。ご飯は家（うち）で食べます」

だけど唯為理は、主人公のそんな小さな望みさえ断ち切っていく。
その迷いのない姿は、もう、出会った頃とはまるで違っていた。

【申し訳なさそうに。嘘をつく。さつきまで編集と電話していた事を利用する】

原稿、直す所があつて。

明日は作業できないから。すぐ取り掛からないと

〈主人公〉

「……だつたら、送る」

【すごく嬉しいのに、やんわり断る】

いえ。すぐそこですから。一人で帰ります」

〈主人公〉

「でも」

主人公の言葉に、唯為理は小さく首を振る。

これからどうするべきかは、もう全て決めているようだつた。

「わざと明るく」

じやあ、ここから家に入るまで、見ていて下さい！」

——ああ、これで終わりなんだ。

わたし、唯為理ちゃんにはもう会えないんだ。

主人公、別れを悟り、ベンチに座つたまま唯為理を見上げる。

今日が終わりになるなんて、少しも思つていなかつた。

ほんの数時間前は、明日も、明後日も、望めばいつだつて、その手に触れられると思つていたのに――……。

〈主人公〉

「……わかつた。また明日ね」

SE19 主人公がベンチから立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

主人公がベンチから立ち上ると、唯為理は一步離れた。

それに、やんわりと拒絶された気持ちになつて、主人公は動けなくなる。

今手を伸ばせば、間に合つたかもしれないのに、できなかつた。

「[わざと明るく】

はい！ また明日。

【まるで『さよなら』と言うように】

本当にありがとうございました】

〈主人公〉

「じゃあ……おやすみなさい」

S E 20 唯為理が歩き出す音

【最初から最後まで流す】

主人公、自宅に向かつて歩き出す唯為理を、ただ遠くから見つめる。
その距離はほんのわずかなのに、どうしても越えられず、近寄れない。

唯為理、一度立ち止まる。

※少し声が遠い※

「まるで『さよなら』と言うように】

おやすみなさい」

薄闇の中、唯為理が振り向いて、小さな声で言つた。

でもすぐにまた前を向いて、そのまま振り返らずに小湊家へ戻つていく。
やがて小湊家にたどり着くころには死角になつて、見えなくなつてしまふ。

それを――：主人公はずっと立ち尽くしたまま見ている。

S E 2 1 唯為理が歩き出す音2

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかってフェードアウトする】

ここでフェードアウトして終了。